

日本版「ゲートド住宅地」研究のための理論的検討

上智大学 中野佑一

1 目的

ゲートド・コミュニティやゲートド・マンション、セキュリティタウンなどと称するセキュリティを重視した住宅地が日本でも増えつつある。ゲートド・コミュニティとは、壁やフェンス、警備所やゲートの設置によって公共スペースを私有化し、出入りを制限する住宅街区である。セキュリティタウンとは、防犯を主な目的として、集合住宅地の安全性を領域的に維持しようとする住宅地である。筆者はこうした住宅地の物件のデータや、実際に物件を回ることによって得られた知見をもとに、警備力と領域性の高さを基準に類型化を試み、セキュリティタウンの中にもゲートドの性質に近い住宅地が含まれていることを論じた（中野 2010）。こうした開発形態をもつ住宅地を日本版「ゲートド住宅地」と定義する。本研究の目的は日本版「ゲートド住宅地」を諸外国の研究動向を踏まえて理論的に検討することである。

2 方法

日本では、政治学や環境犯罪学の分野から研究はなされているが、まだ数は少ない。他方、諸外国では、北米をはじめ、南米、アフリカはケニア、南アフリカなど、ヨーロッパではイギリスなど、アジアでは中東諸国、中国などで都市計画や建築、社会学、政治学、地理学、人類学、そして学際的な都市研究から盛んに研究されている。本研究は上記のような研究の蓄積を物件の類型、デベロッパーの開発動機、社会的影響、関係アクターに分けて概観し、物件データベースのデータなどをもとに日本への適用可能性について検討する。

3 ゲートド住宅地研究の動向と日本への適用可能性

まず、ゲートド住宅地を全体的に把握するために、さまざまな類型が提示されている。アメリカ郊外のケースをもとにした類型をはじめ、都心のゲートド・マンションを含めた類型などを参照しながら、ゲートド住宅地を物理的、経済的、社会的、象徴的側面から体系的把握を試みる。そして、Kim Suk Kyung (2006) による、周囲に物理的障壁があるが、完全に入場を制御するわけではないとする認知型ゲートド住宅地 [perceived gated] という概念を用いて日本版ゲートド住宅地への適用を試みる。さらに、デベロッパーの開発動機（住民の居住動機）を安全な空間の確保、物件の不動産価値の維持、コミュニティ感覚について検討する。そして、社会的な影響を社会的排除、グローバリゼーション、ポストモダニズムなどの視点から検討する。

4 今後の課題

日本のゲートド住宅地研究は萌芽的段階にあり、全体像を総合的に捉えるのに十分ではないため、諸外国の研究の蓄積の応用が不可欠である。ただし、諸外国の研究を適用する際には、社会的・政治的文脈を考慮するとともに、犯罪率の高さやシチズンシップの捉え方の違いなどについて注意する必要がある。今後は、研究の蓄積と日本への適用可能性の検討を導き糸として、デベロッパーや警備会社、そこに住む住民に調査していくことが必要になる。

参考文献

- Blakely, Edward J. and Mary Gail Snyder, 1997, *Fortress America: Gated Communities in the United States*, Washington, D.C.: Brookings Institution Press. (=2004, 竹井隆人訳『ゲートド・コミュニティ』集文社。)
- Kim, Suk Kyung, 2006, "The Gated Community: Residents' Crime Experience and Perception of Safety behind Gates and Fences in the Urban Area," Doctor Thesis, (Retrieved March 22, 2010, <http://repository.tamu.edu/bitstream/handle/1969.1/4130/etd-tamu-2006B-ARCH-Kim.pdf?sequence=1>)
- 中野佑一, 2010, 「タウンセキュリティを用いた住宅地の防犯体制——防犯理論の背景と社会学的分析」『上智大学社会学論集』34: 57-77.